

プランゲ文庫雑誌資料にみる 「女性とことば」

遠藤 織枝

1. プランゲ文庫とは

1945-1949年の間の日本がアメリカを中心とする連合軍の占領下にあったとき、連合軍の民間検閲局は日本で出版を予定されるあらゆる刊行物を2部提出することを義務づけた。1部は検閲後出版社にもどし、1部は検閲局が保存した。その170万件の資料を、検閲を指揮したプランゲが、占領終了後アメリカに持ち帰った。それらは、現在アメリカのメリーランド大学にゴードン・W・プランゲ文庫として保存され、整理されている最中である。その中の新聞・雑誌・ポスター・地図資料は整理が終わり、マイクロフィルムに収録され、公開されている。

このマイクロフィルム化された雑誌資料によって、当時の女性とことばに関する意見・感想・評論・随想などを知ろうと試みた結果が本報告である。膨大な資料の中から題名・見出しで「女性語」「婦人語」「女言葉」が含まれるもの、また、「女性の／と言葉」「女と／の言葉」「美しい言葉」「言葉と女性」「婦人の／と言葉」「女子の／と言葉」「乙女と／のことば」が題名になっている記事を検索した。その中から今回の目的に合うものとして収集できたのは2章にあげる48篇である。

雑誌資料が母体であるが、その中には、『主婦と生活』『少女クラブ』などといった大手出版社の著名雑誌から、数ページしかない、たとえば北海道炭鉱組合某支部青年部の発行する機関誌、また、中学校の文集といった小さな規模のものが含まれている。規模の小さい部類のものは今でいうミニコミ誌で、それらの中にはガリ版刷りの粗末なものも含まれている（それらは以下の資料一覧の末尾に〔ガ〕と記した）。検索して得た文章も、川端康成・古谷綱武など著名な文筆家のものから、中学2年生の少女のものまで幅広い。

ガリ版刷りの小冊子の劣化した用紙の文字を判読するとき、占領軍の検閲が大から小まで、また全国津々浦々にいたるまで、実に徹底的に行われていたことに改めて衝撃を受け、圧倒される。

2. 収集した資料（「」は、文章の題名。『』は、掲載された雑誌名。数字は発行時年月）

1. 「女性の言葉」10篇＝『にひがた』1946.5、『前照灯』1948.3、『北嶺』1946.6、『建設』1947.1、1947.2の2号〔ガ〕、『桜SAKURA』1947.2、『親睦』1947.8〔ガ〕、『青年の言葉』1946.9、1946.10の2号、『鉄輪』1946.11
2. 「女性の言葉遣ひ」1篇＝『しぶき』1946.〔ガ〕、「女性の言葉づかひ」1篇＝『婦人画報』1946.1
3. 「女性とことば」1篇＝『八甲田山』1947.3
4. 「若き女性と言葉づかい」1篇＝『シスター』1948.11
5. 「女の言葉」3篇＝『随筆人』1948.6、『ジャーナリスト』1946.12、『緑苑』1948.10、「女のことば」1篇＝『女性改造』1947.1、「男の言葉と女の言葉」2篇＝『婦人の世紀』1946.6、『時計の下』1947.1（2冊の雑誌に掲載されているが同一作品である）
6. 「青年女子の言葉づかひ」1篇＝『海流』1949.1〔ガ〕
7. 「乙女の言葉」1篇＝『清流』1948.6〔ガ〕
8. 「婦人とはなし言葉」1篇＝『主婦と生活』1947.6
9. 「婦人の言葉」3篇＝『青年の言葉』1946.6、1946.7、1946.8の3号
10. 「話し言葉の民主化―婦人語の場合」1篇＝『学校教育』1946.10、「話し言葉の民主化(二)―婦人語の場合」1篇＝『学校教育』1946.11
11. 「美しい言葉」12篇＝『婦人公論』1946.4、『鳩と豆』1947.6〔ガ〕同題名の片桐ユキ子、松浦直子の2篇、『少女クラブ』1947.10、『婦人画報』1948.12、『天乃川』1947.7〔ガ〕、『建設』1947.1、『古市文化』1947.3、『日産朗報』1948.3、『京阪神』1947.7、『竹友文化』1948.11、『ひまわり』1947.4、「美志い言葉」1篇＝『蒼空』1949.6〔ガ〕
12. 「美しい言葉を」3篇＝『やつしろ』1949.2、『ともしび』1948.12〔ガ〕、

『少女の友』1947.1

13. 「美しい言葉遣」1篇＝『労峰』1949.8

14. 「美しい言葉の国」1篇＝『ラジオニュース』1947.6

15. 「令女の言葉」2篇＝『令女界』1949.1、1949.1

ほかに『女の言葉』と題する北条誠と御厨善定の小説作品があったが、今回の考察からは外した。

3. 資料の語るもの

今回の資料は、雑誌に掲載された文章の題名と見出しに「美しい言葉」「女性／婦人／女子／乙女の言葉」など、1. に記した語が含まれるものを検索して取り出した。得られたエッセイなどは、題名や見出しが異なっても、内容は共通する部分が非常に多い。すなわち、「美しい言葉」というのは、女性の言葉であるという前提で書かれている文章が多いからである。そこで、整理するに当たっては、見出しよりも書かれている内容を中心に見ることにする。今回の資料に書かれている内容は、①女性が発することば、つまり女性の発言であったり意見であったり言い分であったりするもの、②女性の使うことばについて論じるもの、に大別される。さらに①は、①-1 女性の発言・言い分と、①-2 女性のことばそのものを書き表したもの、に分かれる。まず①女性の言い分としての「女性とことば」の内容から見ていく。なお、引用文中「／」は改行の印、「#」は判読不能な文字、「…」は省略の印である。

3. ①-1 女性の発言・言い分

雑誌『青年の言葉』は第3号から7号まで、「婦人の言葉」（3～5号）、「女性の言葉」（6、7号）と題するコラムを設けていて、そこで、各地から寄稿された女性の「ことば」を伝えている。毎号5、6人の女性が100字程度の文章を寄せているもので、各号から1、2例をあげる。なお、仮名遣い、句読点の打ち方は原文のままである。

例1 私達若人はもつと勉強しなければ駄目です。新文化建設—私達がや

らねば誰がしませう。皆が自由にまた責任をもつてやらうではありませんか。(長野 佐藤紀美子「婦人の言葉」『青年の言葉』第3号1946.6)

例2 二千六百有余年の歴史に大きな穴をあけたのは国民全体にあるが理想の新日本を建設する責任は私達青年の双肩にかゝつてゐる、友よ手を取り合つて直ちに立ち上がらう。(千葉 伊藤かね子「婦人の言葉」『青年の言葉』第3号1946.6)

例3 人には頼るまい、でないと頼りにならない人を頼って失望したり憤慨したりする、頼りになる人は私の周囲には余りにも少ない。自力一本。(兵庫 井上みゑ子「婦人の言葉」『青年の言葉』第4号1946.7)

例4 何事も単独では出来ぬ必ず他の力を借らなければならぬ、されば事に当たりては我意を張らず常に小異を捨てて大同に就くべし。(福井 向井八代重「女性の言葉」『青年の言葉』第5号1946.8)

例5 *女は裁縫さへでできれば良い?こんな言葉をとき／＼耳にします果してこれで満足してよいのでせうか、否満足できない、してはならない、私達は生れ変つたのです、新しき世に清き姿となつて大地の前に現れたのであります。衣も縫ふ、鍼もとれ、本も読め、社会的に政治的に家庭的に正しく強い自由の持主たれ。

*女性是一家の道具ではない。家財道具のやうな妻は良妻といふべく、言葉はわたくしには一寸解しかねます。(奈良 四浦ミチエ「女性の言葉」『青年の言葉』第6号1946.9)

例6 *女性の涙は美しいものである。涙に人の心を悲しくすると共に又楽しくするきはみなき純情の一しづくである。

*女性は涙を尊ぶべきである勇壮の男子よりも多く恵まれてゐる事を喜ばねばならぬ。(山口 杉山喜子「女性の言葉」『青年の言葉』第7号1946.10)

例1・例2は、敗戦直後の若者の意気盛んな発言である。「新文化建設」「新日本の建設」が自分達青年の肩にかかっているという自負と意気込みが感じられる。例3は他人への依存を廃して自力でたつという悲壮な決意が述

べられる。その一方で例4は、単独では事を進めるのは無理だから我意を張らず、他人との共同をしなければいけないと、他との協調を説く。例5は、自らを家財道具ではないと言い、敗戦の社会変革で生まれ変わった女性として、「新しき世に清き姿となつて」生まれ変わった、他の女性にも「衣も縫ふ、鍼もとれ、本も読め、社会的に政治的に家庭的に正しく強い自由の持主たれ」と呼びかける。自らの意識変革と、また他の女性へもそれを呼びかける。「清き姿」など美化しすぎの言い分もあるが、前向きの積極的な「ことば」である。例6は、女性の涙を美しくまた尊いものとして賛美し、このような涙が男性より恵まれている事を喜ぶという自己陶醉に浸っている文章である。

もう1編、女性の言い分を「乙女の言葉」と題して表明したものがある。

例7 *働く人の起床は早い。このはげしい／インフレにふきとばされないように／きちんと髪をゆつて、さあ……／これからはりつめた1日ははじまる

*「どうして#の靴下はこうよく破れるのか／しら？山ほどよみたい本や／勉強しなくてはならないことがあるというのに

*せめて床の中でよもうと／思つた本も／一頁もよまないうちに／ねむくなつてしまつた／#かに祈り深いねむりつく。（「乙女の言葉」

『青流』1948.6〔ガ〕）

女性のつぶやきといった「ことば」である。ナイロンストッキングが出現する前の、靴下がすぐ破れる時代であった。そうした物資の不十分な時期の、しかも時間がない中で読書を渴望する若い女性の日常が語られる「ことば」であった。

徹底的に男性に屈する発言もある。

例8 …男性の方々から表せられつつある言葉「女性は浅薄である」「ウスペラ女が内から戦ひ取つたものではない外から与へられた同権物におだれられて中味は空であるのに大きな顔をして何だ今頃の女性の表面的なつまらなさは男女同権論なんて片腹痛い。…」かく云はれると私達女性はかへすべく言葉を知りませぬ素直に肯定せずに

はゐられませぬ…現代の女性は男性の方々から浅薄なと云はれるまでもなくすべての時々に男性の教養の広く深く豊かなのに驚いて「私達は本当につまらぬ、男性は何故あんなに利口なんだろう」と驚いてゐます。…

…男性の方々この心からなる御同情と御援助を切望してやみません。どうぞどうぞ低き思想しか持ちませぬ私達に社会人として基礎的な知識をお授け下さらん事をお願い致します。(山本静子「女性の言葉」『建設』1947.1〔ガ〕)

なぜ浅薄と言われるのか、ウスッペラと言われる内容はどんなものか、また、教養が広く深く豊かな男性が具体的にどこにいるのか、など、全く検証することなく、男性は偉く女性は劣っていると思いこんでいる。性別で優劣を決めることに何ら疑うことなく、全面的に男性にひれふす女性も敗戦直後にいたのである。

3. ①-2 女性のことばそのものを書き表したもの

この種のものには、女性が発することばを羅列したものと、何かの場面で遭遇して「美しいことば」との印象を受けたことを紹介する種のものとがある。

羅列したものは、

例9 「アラ」／「そおお」／「どうせさうでせうよ」(不機嫌)／「いゝわよ」(不賛成)／「知らないわ」(不服)／「いけ好かない人」(不快)／「きらいだわ」／「駄目よ」／「どうしたの？」／「なあに」／「嫌よ」

「斯くて女の言葉は、自然に洗練されたゼスチュアを伴って、態度に現はすことの困難を言葉の上の戦術としてゐるのである。一ゆめ疎にする勿れー」(里上ゆかり「女の言葉」『ジャーナリスト』1946.12)

というもので、11の例を示し、それらの言外の意味を解説した上で、それらが男性に向けて、いかに武器として有効であるかを説いている。男性攻略用のツールとしての「女のことば」である。

「美しいことば」の例として示したものは、

例10 「私はもう少し待ちますからお婆さん先になりなさい」(片桐ユキ子
「美しい言葉」『鳩と豆』1947.6)

というもので、バスを待つ人の間で交わされる情景を描いたものである。買い出し風のお婆さんと娘が話している。バスがやってきて、待っていた人たちが入り口に殺到する。お婆さんは乗れないかもしれないとあわてる。その時、娘がゆずって発した言葉である。それを、聞いてこの文の著者が「本当に美しい言葉でした」と結んでいて、それが題にもなっている。

もう1例は、「お持ちませう」を美しいことばだとする。

例11 「持つてあげませう」と大きな風呂敷包みを受け取ったが、持つて上げるといふ言葉が「私が之だけ持つて上げるのですから感謝してください。」といふ間接語と思はれ気になりだした。「お持ちませう。」「持ちませう。」「持たしてください。」と心の中で呟いて、「お持ちませう」が一番良いだらうといふ結論に到達した。美しいのも様々あるけれど、必要な時にのみ理知と情操の調和された潤ひのある言葉を用ふる事を理想として進みたいものである。(田中千代子「美しい言葉」『古市文化』1947.3)

と著者は述べる。「必要な時にのみ理知と情操の調和された潤ひのある言葉を用ふる」のは、言うのは易しいが実際となるとそう簡単ではなかったろう。

3. ② 女性のことばについて評価したり、感想を述べたりするもの

3. ②-1 女性のことばが乱暴になったことを指摘するもの

例12 この頃、街を歩いても、電車に乗つても気になるのは女性の言葉づかひの乱暴さです。一昨日罹災者への日常品販売が上野のデパートであるといふので出かけたところ、真黒になつた人の山の中から「役人出てこい。出てきたら、のしてやるから…」とか「さうだ、さうだ、のしてやれ」といふ女性の声があるのでびつくりしましたが、よくみると、それが奇麗に着飾つた若い娘さん風なので二度びつくりしました。(丹波静枝「女性の言葉づかひ」『婦人画報』1946.1)

例13 この頃街を歩いても汽車に乗っても気になるのは、若い女性の言葉遣いの乱暴な事です／…／敗戦以来人の情に飢えたこの頃、心のうるほひは／先ず言葉遣ひから始めよう。このうるほひは世の中を明るくする事であらう。(優美子「女性の言葉遣ひ」『しぶき』1946.9〔ガ〕)

この2例の書き出しが極めて似ていることにまず驚く。時期的に例12の方が早く、大手の雑誌であり、例13はガリ版で刷られた小規模な青年団の配布物であることから、例13が例12を真似たということが考えられる。後半は全く異なる文章であるから、この部分だけ偶然に似たのだとも考えられる。次も女性のことばと乱暴について書いている

例14 近頃の女の言葉が乱暴になったという声が各方面で起っている。いくら男女同権とは呼ばれたとしても女は男の言葉をまねる必要はない。

…この頃の女の言葉は随分粗雑になった。丁寧でないばかりかうるほひすらない。…女の言葉は…品があり、美しい調子がなければならぬ。…美しい言葉がどんなに人間生活を明るくするかよくするか亦女らしさ、やさしさを増すかを考えて見るのがよい。(IN生「美しい言葉」『蒼空』1949.6〔ガ〕)

この文章は、中村(2010:26)の言う、メタ言説を想起させる。中村は女ことばについて語ることが女ことばを作ってきたという。実態ではなく言説が事実を左右するというもので、例14の書き出しも「…という声が各方面で起こっている」として、各方面とばかりしておいて、実際の乱暴な例は示されない。粗雑になったとも記すが、その前のどのようなことばがどのようなことばになって粗雑になったのか示されない。丁寧でなく潤いがないことばだと言うが、それらがどのようなことばなのかわからない。乱暴で粗雑で丁寧でなく潤いがない、という抽象語だけが躍っている。

例15 敗戦後兎角人々の心が荒び、すさまじいまでの言語挙動は男女同権を穿き違ひて稍もすれば忘れ勝な女性としてのつゝましさを忘れてゐるのではないでせうか。

…各人が常に女性としてのつゝましい言葉遣ひに心を留めて居りま

したなら、もつと和やかな生活が営める筈でせう。…

私達はやさしく上品でいつも自制された道徳的な女性として心眼をひらきませう。

そして何もかも超越して自己の純真な心に戻り心掛け一つで実行出来るこのつましい言葉遣ひから良き女性界を開拓しようではありませんか。(E子「女性の言葉」『鉄輪』1946. 11)

女性のことがすさまじくなったのは、男女同権のはき違えだという。女性はやさしく、つましく、上品な言葉づかいをすべきで、そこから「良き女性界を開拓する」という。「E子」さんは男女同権については異論はない人のようだが、つましく上品な言葉づかいで開拓する「女性界」とはどんな世界なのだろうか。

例16 女性が女性たる自覚を忘れ、男の様な荒々しい言葉を使い、得々として居る様を見ます時、私はぞつと背筋に寒さを感じ、…貴女方が得々として荒々しい言葉を使い、嘲り合つて居る様など見ます時、大いに反省の必要があると思ひます。…

今日の我が国は政治的に、文化的に、凡てを挙げて民主主義を称へられて居ります時、言葉の自由と言ふ事を考へなければならぬと思ひます。否、言葉の自由からと申して、自我を通して女性の閑雅を失ふ様な態度に出る人があるとしますれば、私は恐らく自由と言ふ事はき違へて居ると思ひます。…

…お互いが家庭に、職場に、寸暇を惜しみ教養を向上し、意識の伴はぬ混乱を捨て、明るい民主生活を楽しく過し、言葉の民主化に務めませう。

…再び申し上げますが「民主主義は言葉から」と繰返し筆をおきます。(路傍の石「女性の言葉」『北嶺』1946. 6)

民主主義と自由も当時のキーワードであった。だから、「言葉の自由」「言葉の民主化」「民主主義は言葉から」とスローガンのように並べ立ててはいるが、「女性たる自覚を忘れ」「得々と荒々しい言葉を使う」女性に対して反省を求める「路傍の石」さんの言わんとしていることは全くわからない。家

庭や職場で教養を向上すればことばの民主化が達成されるということと、「民主主義は言葉から」ということと、女性が男の様な荒々しいことばを使ってはいけないこととがどう結びつくのか全くわからない。民主主義や自由、男女同権などの概念が上滑りのまま使われていたことの例証である。当時の論壇では、例えば『婦人の世紀』創刊号（1947. 2月）では「婦人解放の意義について」（森戸辰男）「女性の隷属性について」（帯刀貞代）など、第3号（1947. 9月）では「民主主義とは何か」（原田綱）のような論文が軒を連ねていて、ある意味では国内にこの種の議論が巻き起こっていた時代である。そのような背景の中に、こうした女性の発言も置いて考えてみなければいけないだろう。

3. ②-2 女性は「美しい言葉」を使うべきだとするもの

評論家古谷綱武は『婦人公論』の1946年4月号で、復員して、若い女性の言葉が出征前とはずいぶん変わっていることに気づいたという文章を載せている。若い知識女性が「澎湃として起つたんです」「示唆を受けたわ」「私が見解を開陳すると」「とても激越な口調で」（傍点は古谷）など「ずいぶん耳なれない漢字をたくさん含んでい」て、戦争中に盛んに使われたり作られたりしたいわば戦争日本語を、そのまま口にしている。そういう言葉を使う若い女性に、特別な考えがあるのかと聞くと、「これからは女性も、男のなかに立ちまじって働かなければならない。女だからと言つて、以前のようにでれでれした言葉を使つていてはならない。それで自分も、できるだけ男のやうな言葉を使うことにしている」と答えたという。それを受けて古谷は、

例17 ほんとに生きた言葉といふものは、上から教へられて、それを暗記するだけでは得られない。…『めちやくちや』とか『でたらめ』とか、『天どん』『豚かつ』のやうな新造語は決して美しい言葉ではないが、さういふ意味（生活の内部を生きぬけてくるのに耐えられた、遠藤注）では、たしかに生きた迫力をもつてゐる言葉なのである。

…私のいつてゐることはむかしの家のなかにとじこもつてゐた日本の品のよい家庭婦人の言葉に、今の女性が立ちかへれといふことをい

つてゐるのではない。…新しい時代には新しい時代に添った服装が
つくりだされてゆかなければならないのである。

言葉の世界でも、それは全く同じことである。ただ絶対に必要な条件
として、それはあくまで美しく、どこまでも身につけてゐなければなら
ないのである。…いつの時代がきても、女性のみの美しい言葉が
あることを忘れてはならないのである。(古谷綱武「美しい言葉」『婦
人公論』1946. 4)

漢語の多いことばを女性が使うなと戒められたのは、室町時代に遡る。女
房詞は「火事」と言わずに「あかごと」と言い、「金子^{きんす}」はだめで、「こがね」
だった。若い女性が「意見を開陳すると」と実際に話し言葉の中で言ったか
どうかは疑問だが、「示唆を受ける」「激越な口調で」など、おかしくはない。
古谷は新しい時代に新しい言葉と言いながら、結局は「女性のみの美しい言
葉」を主張する。

おそらくは戦後間もない時代、紙や活字に飢えていた人たちは『婦人公論』
などの雑誌には飛びついたであろう。そこで開陳される著名評論家の意見を
尤もだと思う人も多かっただろう。そういう人たちがミニコミで自分の思い
として開陳する、という循環があったと考えられる。その出発点に位置した
論評の一つではなかったろうか。青年団や、組合の婦人部の機関誌はもとより、
少女雑誌や中学校の文集でも、「美しい言葉」「正しい言葉」が次々と主張
されていく。

例18 …ほんの一言で相手を喜ばせもし不愉快にもさせるのですから言
葉の力は大さいと思ひ、又一方正しい言葉をも使ふやう気をつけたい
と思ひます。フランス人は正しい言葉を使ふ為にフランス語の稽古を
するときゝました。私達も国語を美しく活かす為にそれ位の努力をし
ようではありませんか。(兵庫 白藤三千穂「美しい言葉を」『少女の
友』1947. 1)

少女は、相手を不愉快にさせないために言葉づかいに気をつけることと、
フランス人のように正しい自国語を話すための努力を呼びかけている。

例19 本当の美しい言葉をつかふと云ふのは人とお話をしても其の相手

に不快を感じさせない様にすることではないかと思ひます。…女性には特別ひがみ心がありますから気をつけなくてはならないでしょう。これからの勤めの多い青年の間ではそんな事で感情を害さぬ様心がける必要があるのではないでせうか、ほんの一言で相手を喜ばせもし不愉快にもさせるのですから言葉の力は大きいと思ひ又一方では正しい言葉ををマ使ふ様氣をやりたいと思ひます。フランス人は正しい言葉を使ふ為フランス語稽古すると聞きました。私達も国語を美しく話す為にそれ位の努力をしようではありませんか。(大西女子「美しい言葉」『建設』1947.1〔ガ〕)

「ほんの一言で」以下は句読点を除いて例18と全く同文である。片や全国の少女を読者に持つ大雑誌、片や村の青年部のガリ版刷り機関誌、となると、後者が前者を模倣したことは明らかである。さらにもう1篇剽窃が見つかった。

例20 ある本で私はフランス人は正しい言葉を使うためにフランス語のけいこをすると書いてありました。私たちも国語を活かすためにこれ位の努力をしましょう。美しい言葉はただうわべだけでのかざりたてた言葉のことでなく真実の心からいうのでなくては美しいと言えないでしょう上品さもなくてはいけないでしょう。男の人はらんぼうな言い方をしないで女の人は上品な言い方…これからはみんな美しく正しき言葉を使うよう氣をつけましょう。(第二学年 古森節子「美しい言葉」『ともしび』1948.12〔ガ〕)

先に述べた例12に対する例13の関係とも共通している。例13は剽窃とは断定できないがその疑いが大きかった。今回の資料わずかに48編の中の2編が剽窃によるもので、1篇がその疑いの大きいものであることがわかった。敗戦直後でモラルが地に落ちていたと見るべきか、当時は、公表された文章に対する著作権尊重の意識が普及していなかったのか。それとも、中央誌を読む者が読まない仲間たちによいものを紹介して、広めようとする使命感の表れと見るべきか、私は悩む。理由の判断はできないが、そうは言っても、例19・20の筆者が、自分の文章として署名入りで自信をもって書いているのは、

フェアな態度とは言えまい。

驚きのあまり脱線してしまった。「美しいことば」にもどすと、ほかにも、

例21 やさしい美しい言葉程人の気持をなごやかにするものはありません。…美しい言葉から美しい環境へ、そして明るい世の中へと努力して行きたいと思ひます。(佐々木幸恵「美しい言葉」『天の川』1947. 7)

例22 美しい言葉が次々と私達の間から失はれてゆきつつあることを私は淋しい気持で感じております。…日々の生活に、美しい心を持つて何のこだはりもなく、いつはりのない美しい言葉が使へる様になったら本当にどれ程楽しく明るい生活が送れるでせう。(澤「美しい言葉」『日産朗報』1948. 3)

など、「美しい言葉」が何事も解決してくれる切り札として捉えられている文章が続く。当時の著名な国文学者池田弥三郎も少女雑誌に「美しい言葉」と題して書いている。

例23 (経済安定本部をアンボンという言い方がはやっているが、こういう略語はやめた方がいい旨の文章に続けて) …アンボンというかわりにきちんと正確に経済安定本部といっても、決して大した時間がかかるわけではありません。…たとえ新聞で、そういういやな言葉をつくっても、多くの人が使わなければ、しぜんそういういやな感じの言葉は生まれたままで育たないことになります。…みなさんは、ことに女の人は新聞にはやっている言葉を、流行語をけっして使わないようにすることです。流行語はさんざん使われて、すっかりすりへってから使うのです。服装でもなんでも流行ばかり追うことはあまり感心しませんが、とりわけ言葉の場合は、一ばん流行遅れであってください。それがみなさんの言葉の品位をたもつ、大事なじょうけんなのです。(池田弥三郎「美しい言葉」『少女クラブ』1947. 10)

洒脱な江戸趣味でならした国文学者の少女向けのエッセイである。特に女性には流行語を追いかけてはいけない、という教えは江戸時代の女訓書以来の伝統である。江戸時代の『女重宝記』で、「かやうのときはやりことばな

どよき女中の一ごんものたまふことにあらず」と流行語の使用を戒めた思想が、戦後の新しい世の中にも生きていたのである。

「美しい言葉」の最後に川端康成の短いエッセイを紹介する。川端は、女学校5年生になるF子さん宛という形で書いている。戦後の新しい教科書に美しい文章がない、今の日本の国語がそうだから、日本の国語を美しくする為に働きたいが自分にはその力がない、若い世代に日本語を改めてほしい、と述べてきて、以下のように結んでいる。

例24 美しい言葉、確かな言葉、真実の言葉で、話したり書いたりするようにならないと、日本は無駄な骨折りや心暗い迷いがなお続くでしょう。

日本の自然の春のような言葉と文章との本を、私はFさんにもうちの娘にも見せたいと思いますが、今はめつたにありません。御自分の使う言葉、本で読む文章を、よく批判して考えてみて下さいと言うだけです。美しい日本の言葉と文章とがFさんたちの未来にありますように。(川端康成「美しい言葉」『ひまわり』1947.4、4月5月合併号)

日本語と日本語の文章に対して、ずいぶんと、暗い悲観的な見方をしている。戦後の浮き足立った明るくて軽いことば観を苦々しく見てきた作家の真情であったかもしれない。それにしても、晩年の「美しい日本の私」との差は大きい。

3. ②-3 識者の論じる女性のことば

国語学者で、婦人語の研究を最初に手がけた真下三郎が真っ先に「話し言葉の民主化―婦人語の場合―」という論文を『学校教育』(1946.10月、11月)に2回にわたって載せている。10月号の方は、「婦人語の場合」という副題に背いて、子供の教育にのみ論及されている。すなわち、男女のことばの性差について小学校の早期から自覚させよという趣旨である。11月号は女性のことばについて述べている。若い女性のことばがひどくなつたと、各婦人雑誌では論じられているが、その根本は「婦人の話し言葉からその主たる要

素である敬讓的発想がとり去られたことであり、婦人から「女らしさ」が無くなったことを意味する」と述べてきて、真下は以下のような論を展開する。

例25 婦人が男子のやうな言葉をわざと用ひることを以て、男女同権・民主化傾向であると即断してはならない。もとより男女は本質的法律的には人間として平等であらうが、それぞれ男女といふ本質を異にし、その本性に即した分ちを有してゐる。…例へば愛情とか優しさとか慎ましさとか又は遠慮深さとかいふものは、婦人に多く備はるべき徳性であり、それらが所謂女らしさを構成する。従つてそこからにじみ出てくる謙虚鄭重な言葉即ち敬讓的発想の言葉は、婦人語たるの特質を示してゐるのである。…私は…婦人自身が日本婦人たるの矜持を一層高く持たれることを希望したい。…将来の婦人の話し言葉は文化国民にふさはしく、婦人らしい聡明を湛えた優雅鄭重なものが基準になるであらうと思ふ。…

(言葉の) 組織立つた指導の例として、婦人語に関し、江戸時代庶民に行はれたものを「往来物」によつて項目だけ掲げる。1, 硬い漢語など男子のやうな言葉を使つてはならない。2, 女らしい女房詞などは極力使ふやうにする。3, 流行語は一切使つてはならない、4, 片言即ち訛言方言は使はないやうに努める。…これが百五十年間明治の世まで引き続いて行はれた。…言葉の指導は庶民にあつては女性だけが必要とせられてゐた。…いふまでもなくこの時代は婦人の実力が認められてゐなかつた時代であつた。…かやうに男子絶対の時代なればこそ婦人のみが謙虚な言葉遣をするやうに強要されたのであつて、しかもそれが男子の定めた婦徳に当り婦言に適ふとせられて、この種の往来物に記載せられたのである。

…もとより今後といへども婦人の言葉が優雅鄭重であるべきことは些かも変りはない。しかしそれは徳性や礼法に係はあつても、男子に強請された屈従の所産ではなくて、あくまで自覚した婦人の本性から湧き出るもの、いはば「我」の意識に目覚めた所からにじみ出るものでなければならない。(真下三郎「話し言葉の民主化—婦人語の場

合一」『学校教育』1946. 11)

女性の言葉の権威であるだけに、歴史的に女性の言葉の教育が男子中心社会の産物であったことは見抜いている。それは、今の時代とは背景が異なっていることも弁えてはいる。だから、この「話し言葉の民主化」題目にも惹かれるし、敗戦により民主国家となった時代にあってどのような言葉がふさわしいか、が論じられると期待しながら読み進めていくのだが、結局最後までどうすれば婦人の話し言葉が民主化されるのか、論じられない。江戸時代以降、「往来物」に見るように、男子中心の考え方から、女性の言葉は多くの制約を受けた。それは屈従の所産であった。そこまではいい。しかし、その一方で、女性の言葉はあくまでも「敬謙的・優雅・鄭重」でなければいけないという。それらこそが、男尊女卑の時代の「屈従の所産」ではなかったのか。女性の言葉研究の第一人者であった真下にとっての民主化がどのようなものか全く示されていないで、肩透かしを食った気分である。

作家で言語学者、そして日本共産党中央委員であった高倉テルは『女性改造』1947年1月号の巻頭に「女のことば」を8頁にわたって書いている。

例26 ひと、わかい女が男のようなことばを使い始めて、問題になったことがある。とくに、代名詞を『きみ、ぼく』で話すのが人をおどろかした。…しかし、どうして女が男のことばを使つてはいけないのだろう。こんどのあたらしい憲法でも、法律的に、社会的に、家庭的に、いつさいの点で、女は男とまったく同じ地位をしめ、まったく同じ権利をもてることになっている。それに、どうして、ことばだけ、男とちがうものを使わなければならないのだろう？

…男と女と、あらゆる点で、地位がひじょうにちがう。これがこれまでのニッポンの社会の大きな特色だつた。…そこで、女は男のことばを使うことができず、男とはちがう『女のことば』を使わなければならなかつた。

…女というものの地位が、政治的にも、社会的にも、家庭的にも同じように封建的な差別をつけられていたから、いつまでも女と男のことばがちがわなければならなかつた。

しかし、とうとう、女の地位があらゆる意味で男と同じになるとき
きた。いやおうなしに、女のことばも男と同じものにならねばならな
い。女が男の使う代名詞の『きみ、ぼく』で話すようになったのも、
けつきよく、その前奏曲にほかならなかった。

女と男と同じことばで話すようになる。すくなくとも、そういう方向
へむかつて、ニッポン語が大きく進む。今でも、百姓や労働者たちは、
男と同じことばで話している。これは、これまでは、よくない慣わし
であるようにいわれていた。じつさいは、あべこべだった。生産点に
ある女たちこそが正しい未来のニッポン語を話していた。ニッポン語
が、今こそ、ニッポン人ぜんたいのほんとうのニッポン語になる。そ
の大きなやくめを女がはたさなければならぬときがきた。

(1946. 11. 8) (高倉テル「女のことば」『女性改造』1947. 1)

漢字使用を少なくし、平易な用語を用いて、実に明快に言い切っている。
女性のことばが乱暴になったのではなく、それまで身分差で使えなかった男
の言葉が使えるようになっただけだという。さらに、憲法で女性が男性と全
く同じ権利をもつようになったのだから、言葉も同じでなければならない。
男も女も同じ言葉を使うとき日本語も変わる。日本語を変えるのは女性だ
というのである。こういう論調がどの程度影響力があったのだろう。主流であ
ったなら、今の日本語は大きく変わっていたであろうと思うと、痛く惜しま
れる。

登山家で料理研究家でもあった村井米子も「女の言葉」という随筆を書い
ている。

例27 このごろ、女言葉を止めよ、というような事が問題になっているが、
曾って、…昭和15年南京・上海・漢口などで中国の新女性と旅をし
たとき、彼女達に日本人女性の地位が低いのは女の言葉による、日本
の封建性が女の言葉を別にさせている、敬語が多いのも封建制の表れ
で特に女の言葉にそれが強い、と指摘されたとき、…たしかに普通
以上にあの言葉が謙遜である点などに、女性の地位の低さというもの
をほのかに感じられるようである。…

そうだという言葉と、そうね、という言葉と較べてみたとき、…やはりそうだ、の方が横柄で、まったく平等の立場とは感じないかもしれぬ。しかもそうでございます。となつたらやはり鄭重になっているだけ、位置が低い者の言葉と考えられるであろう。…

いうまでもなく言葉にあらはれて思想も明らかになるのである。言葉と思想とは不可分である。とはいふものの、このごろの若い女の人達によく見るように、粗暴な態度や、荒つばい言葉づかひがいはというのではない。あくまでも女の言葉は美しく、やわらかく、世のうるおひであつてほしいのだが、その上に卑下や謙遜に過ぎぬ、男言葉との対等性がほしいのだからむづかしい。むづかしいが掘り下げて見ねばならぬ問題だということをしきりに私はおもっている。(村井米子「女の言葉」『随筆人』1948.6)

女言葉をやめよと言うことが問題になっていた、と言う事実を知るための貴重な随筆だといえる。遠藤(1994)にも述べたように、鈴木文四朗が女性語廃止論をラジオで放送して、それに対する反響が『婦人公論』1948年7月号に座談会の形で載っている。同じ時期だから、村井もそれを意識していたことがわかる。しかし、村井のエッセイではやめたほうがいいのか、やめないほうがいいのかわからない。男女の言葉は対等であつてほしいが、女の言葉は美しく、やわらかく、世のうるおいであつてほしい。だから掘り下げて考える、というのだ。これでは何も言っていないのと同じではないか。

民俗学者で『日本語の歴史』(平凡社1963-66)の共編者でもある大藤時彦も「男の言葉と女の言葉」と題して長い文章を書いている。なお、この文章は『婦人の世紀』(1948.6 婦人の世紀社)と『時計の下』(1949.1 山形県庁職員組合)の両誌に掲載されている。同じ著者の文章が中央誌と地方の印刷物に載ることはまああることで、あえて目くじらは立てないが、前者は「大藤時彦」、後者は「おおふじときひこ」と筆者名の表記を変えていることに、筆者の心理のわずかなゆれがのぞかれる。

例28 男と女の言葉が違つてゐるのは日本語の大きな特色である。文字や言語についての論議がさかんに行はれてゐる昨今、…女の言葉に対

する是非が問題とされてゐるのは当然なことといへる。…女の言葉の階級制は、敬語の階級制からきている。…女が男と同じ言葉を使ふやうにすべしとの意見は、現在男の使つてゐる言葉通りといふのなら大いに考へものである。今の男の言葉は非常に欠点が多い。決してよい言葉とはいへない。…これに比べれば同様に悪くなつてゐるといつても女の言葉の方がまだましである。だから女が男の言葉を使ふのは自分のよい言葉をすてて悪い言葉につくことになる、…私はむしろ男の言葉の方を女の言葉へと近づけてゆきたい。…地位や身分によつて区別の生じた言葉はそれらの格式がなくなつてしまへば、ほつて置いても言語の特殊性は失はれてゆく。ある特別の階層の言葉もその階層が解消されれば、その言葉を維持する要件がなくなるのだから、一般共通の言葉の中にとけ込んでしまふ。つまり社会が民主化せば言葉も自然民主化して来る。…私は女の言葉を問題にするのは、…女のなごやかな物言ひ、巧みな言葉の選択、こまかな感情の言ひあrawしなど、男の言葉に欠けてゐる美点を尊重するからである。これを粗雑な言葉にかへることを惜しむ故である。女の言葉をやめよといつてゐる人でも、男の言葉をそのままなんでも使へといふのではないと思ふ。…

女の言葉が特別にあつては、男女平等の社会が生まれないとは断言出来ない。反対に言葉が同じでも不平等の社会はあり得る。要するに女言葉の問題は婦人自らの決すべきことがらである。たゞその判断を下す前に、国語の成長の上に婦人が大きな働きを過去に於てなして来たことと、将来の国語改良がやはり婦人の力にまつ所多きを知つてゐて貰ひたいのである。(大藤時彦「男の言葉と女の言葉」『婦人の世紀』1948. 6、おおふじときひこ『時計の下』1949. 1. 20)

戦時中、日本語の美しさを女性のことば特に敬語にありとして、持ち上げられていたことは遠藤(2010)に詳述している。その女性語讃美論と、戦後民主主義の導入、封建制打破の主張の一つとして女性語廃止論がせめぎ合つていた事情の元にならされている。男のことばより女のことばに将来性があると

言いながら、男女別のことばがあっても平等の社会があり、ことばが平等でも不平等な社会があると、突然それまでの主張を替えてきて、ことばも対等にしなくてもいいと言う。さらに、日本語を改良するのは女性だと女性をもちあげ、決定権をゆだねている。ゆだねられた女性たちが、その自覚がなかったのは、残念ながら事実であろう。それは、すでに紹介してきたミニコミの論調を見れば明らかであった。識者達は民主化とことばの対等を結びつけていたが、その一方では民主化しても、女は女らしく優しく美しいことばを使えと主張し続け、庶民の女性たちはその説を受け入れて、互いに上品な美しいことばを使いましょうと言い合ってきたのだ。

女性の意識をかえるのが困難であったのは、女性のリーダーの不在もあったと思う。リーダーはいても、少なかったし、女性の社会的地位を高め、政治的力を獲得し、女性の教育を普及させるなどの必要性は気づいていても、そうした意識を変える根底にことばがあることに気づいていなかった。65年経た今、ことばによる意識改革の好機を逸したことが、そのまま、国連のジェンダー指数に代表されるような現在の日本の女性の地位の低さとして後を引いていることを知るにつけ、千載一遇のチャンスを逃したことは、残念としか言いようがない。

女学生のことばを全面的に肯定していた識者はいた。著名な音楽学者であった兼常清佐は言う。日本語には多くの話し言葉があるのが面白い。元は身分の差から出たもので、身分の違いなどはなくした方がいい。しかし、さまざまな日本語を一色にしろとは言わない。私は女学生の話し言葉を軽るはずみな、いやらしい言葉だといって悪く言う人を知っているが、と述べてきて、以下のように言う。

例29 私は今の女学生の話し言葉を決してとがめたり、悪く言ったりしようとは思わない。女学生は女学生言葉を話すからこそ自分自身の気持ちをよく言いあらわすことが出来る。女学生は女学生の言葉をこそ話すべきである。…それがだんだん変つて行つていい。…新しく、新しくいろいろな言い方を考えて、新しい女学生言葉をはやらせなくてはならない。…女学生の言葉が短くて、きれぎれで、一体に尻上がり

口調であることによく現われている。私はニホン語からこのような気持の言葉として女学生言葉を失いたくないと思う。ただそれをだんだんいい言葉になるように変らせて行きたいのである。…何が美しいかは女学生自身がきめることである。(兼常清佐「若き女性と言葉づかい」『シスター』1948. 11)

きれぎれで尻上がり口調の女学生の言葉が「気持の言葉」でそうした部分が日本語に必要だという。女学生の言葉はいつの世にも非難の対象であるが、それをはやらせなくてはいけないとまで援護した例は少ないのではないか。しかし、ここで最後に述べられた、例26と同じ女学生の自己決定への委譲にはこだわりたくなる。男性が女性や女学生に自分の言葉をきめさせるというのは、一見女性の理解者でフェミニストであるかにみえる。しかし、女性が自分たちで決めようとしても決められない、また決めさせない環境があり圧力があるときに、それを言い放つだけなのは無責任ではないか。自分に何の痛みも影響もないから物分かりよく言えるだけなのではないか。

最後は、女子高校生の「女性の言葉観」で稿をしめくりたい。

例30 私はこの頃、女の言葉と云うものが、いかにつまらないものであるかと云うことをつくづく感じる。女の言葉には、まったく教養がなく、理智の閃きが少しも見えない。詩や歌にしても一般に女のものは、とにかく感情的ですつきりせず、それかと云つて、理智的なものになると、いやにつん／＼していて女らしい感覚が欠けている。特に女学生のものになると極端に感情的で弱々しく、美しいものばかりを並べたてゝ、その底に飛躍する力強い生命、情熱と云うものがどこにも見られない。話すことと云えば、まったく無意味なものばかりでお話にならない。そして挨拶にはずい分無駄が多い。八割迄お世辞や、当り前のことばかりで、まったく馬鹿氣ている。そうしてたつた一言を云うのにあらゆる努力を傾けて色々な形容詞を引つ張り出すがかんじんな要領を得る様なことは一つも云い表せない。

結局女の言葉と云うものは、自分の人格を引き下げるのに努力している様なものである。(加藤やす代「女の言葉」『緑苑』1948. 10)

自虐的とも言えるほど、「女の言葉」の欠陥を率直に言い切っている。高校の文集に載った文章である。以上に紹介してきた、高倉テル以外の識者の、当たり障りのない論文・エッセイと、機関誌などの、正しい美しい言葉を実践すべしとの、教養を押しつけてきた「正論」の中で、ここまで、堂々と本心を言い切ったのは天晴れと言うほかない。この小気味よさは、新日本の再建・民主化・男女同権など勇ましいことばとは別のところで、しかも確実に、戦後の女性の解放感を体得していた女子高校生の実感の発露に由来するのであろう。これほどまでに女性の言葉の悪弊を見抜いた女子高校生は次なる道を切り開いていったはずである。その可能性をこの文章は示唆している。

長々とプランゲ資料につきあってきた。敗戦直後の女性の言葉に関するさまざまなつぶやきや論評からは、当時の混乱と何かしら新しく再生したいという、前向きでひたむきな思いが伝わってくる。民主化と男女の言葉の不一致はおかしいと、また、女性の言葉が丁寧で上品なのは、女性を低く見た封建制度の名残であると、明言する識者もいた。

その後60年、社会の安定化とともに、そうした言説は消えてしまった。そして、日本語に性差があることを自明のこととし、それを正当化するために女性の言葉を集め、分析し多くの数値を積み上げる研究に没頭する研究者が増えてきた。

日本語の女性のことばを研究している人、またこれから研究したいと考えている人にぜひとも勧めたい。いまいちど、プランゲ文庫の資料をひもといて、当時の女性の言葉に対する熱い思いにふれられんことを。

資料一覧

『蒼空』若草会1949.6〔ガ〕

『天乃川』米原鉄道倶楽部文芸部1947.7〔ガ〕

『海流』松原地蔵尊発行1949.1〔ガ〕

『学校教育』広島高等師範学校付属小学校学校教育研究会1946.10、1946.11

『京阪神』京阪神急行電鉄労働組合1947.7

『建設』岡山県勝加茂青年団文化部1947.1、1947.2の2号〔ガ〕

『桜SAKURA』桜組工業従業員組合文化部1947. 2

『シスター』臼井喜久太郎発行1948. 11

『しぶき』静岡県雄踏町男女青年団文化部1946. 7

『ジャーナリスト』山下紫発行1946. 12

『主婦と生活』主婦と生活社1947. 6

『少女クラブ』大日本雄弁会講談社1947. 10

『少女の友』実業之日本社1947. 1

『女性改造』改造社1947. 1

『親睦』広島県下谷青年親睦会1947. 8

『随筆人』随筆人発行所1948. 6

『青年の言葉』大津喜宜1946. 9、1946. 10の2号と1946. 6、1946. 7、1946. 8の3号

『青流』全日本農業従業員組合山口県支部青年部婦人部1948. 6〔ガ〕

『前照灯』西舞鶴機関区青年部1948. 3

『竹友文化』国立大竹病院患者自治会文化部1948. 11

『鉄輪』東武鉄道総務部教務課1946. 11

『時計の下』山形県庁職員組合1947. 1

『ともしび』広島県牧村牧中学校正伸会1948. 12〔ガ〕

『日産朗報』日産化学工業株式会社王子工場1948. 3

『にひがた』新潟日報社1946. 5

『八甲田山』八甲田山社1947. 3

『鳩と豆』新潟県通信病院文化部1947. 6〔ガ〕

『北嶺』北海道炭鉱労働組合雄別支部青年部1946. 6

『婦人画報』東京社1946. 1、婦人画報社1948. 12

『婦人公論』中央公論社1946. 4

『婦人の世紀』婦人の世紀社1946. 6

『古市文化』古市文化協会1947. 3

『やつしろ』宮崎県八代村青年団文化部1949. 2

『ラジオニュース』仙台書房1947. 6

『緑苑』福岡県立嘉穂女子高校1948. 10

『令女界』宝文館1949. 1

『労峰』白井武男発行1949. 8

参考文献

遠藤織枝(1994)「若い女性のことば—論評で綴るその昭和史—」『日本語学』10月号

Vol. 13 明治書院 pp. 19-32

遠藤織枝 (1997)『女のことばの文化史』学陽書房

遠藤織枝 (2010)『日本語は美しいか』三元社

中村桃子 (2010)『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社

付記 今回の資料を入手するにあたって、アメリカ メリーランド大学図書館 ゴードン・W・ブランゲ文庫の坂口英子さんにたいへんお世話になった。坂口さんの熱心なブランゲ文庫のご紹介とアクセス方法のご指導がなかったら、これらの資料へのアプローチもなかったと思う。戦後史の宝の山に接する機会を与えてくださったことに対して心から感謝している。

(えんどう おりえ)